

「組合」の未来を開くゝあとがきにかえてゝ

明治大学 特任教授
同大学野生の科学研究所 所長

中沢 新一

世界中でいま、さまざまな領域での「組合」が、大きな曲がり角にさしかかっている。もつとはつきりと「危機に直面している」といつてもいい。

近代の組合というものは、十九世紀にできた。十九世紀に資本主義は競争的市場主義にもとづいて発達した。そのとき、労働者と資本家の対立がおこった。労働者は自分の労働を商品にした。競争的な市場主義では、労働者の賃金の抑制がおこなわれ、余剰は利潤にまわされた。その結果、労働者の生活は圧迫され、そこから資本と労働のあいだの対立が激しくなったのである。労働者の組合はその対立を調停するために生まれた。これが発端となって近代の組合のかたちがつくられていった。

組合というのは、アソシエーション association の訳語で、共同体 (コミュニティ community) とはつきりした区別をもつ。もともと労働者は、農村部から都心に集中してきた人々の集団である。

農村共同体 (コミュニティ) の解体の上に、農村を離れた人々が、都市に集まって労働者になった。労働者はいわば自由な商品として都市に集まってきており、そこから生活の困窮と生存条件の危機がもたらされた。この問題を解決するために、共同体というものは違う「組合」が必要とされたのである。だから、組合はいったん農村的な共同体が解体されたあとに、その上につくられたものである。農村には伝統的に、共同体とその上に立つアソシエーション的な形態が、宗教の組織などとして存在し、その二つは共存しあっていた。その伝統的な組織形態を復活採用して、新しく「近代の組合」がつくられた。

農業者の組合は、この労働者の組合というものの影響下に生まれた。近代的な意味での農業者の組合も、やはり産業革命の時代である十九世紀に生まれたのである。それは、労働者と資本家の対立とは違う仕組みで発生していた、農村の困窮に対処するために、農民の協同組合が生まれた。歴史的に見ても、まず労働者によって労働組合と彼らのための生活協同組合がつくられ、そのつぎに農民の農業協同組合がつくられている。労働者の組合と農民の組合は、たがいに連動しつつも、異なる課題をもっていた。じつさい日本でも、賀川豊彦などによってまずキリスト教的な労働者の組合がつくられ、ついで農業者の協同組合がつくられている。

労働者の組合と農業者の組合のもつても大きな違いは、農業者は農村に住み、そこ

で生きて機能していた共同体のなかで生きていた点にある。農村には、共同体の上に、共同体の組織とは重なり合いながらも別物としての働きをする、生活と生産の互助組織としての「組合」の諸形態があった。それは「ユイ」のような生活互助組織である。このユイのような伝統的な組合結合組織を利用するかたちで、農村における近代の組合がつくられた。そしてそれが現在の農業協同組合にまでつながっている。

農業者の組合は、労働者の組合とは異なる主題を抱えてきた。労働者も企業家も、近代がつくりだした存在であり、資本と労働の対立は、同じ近代世界の土俵上でたたかわれた。ところが農業者の暮らす農村は、近代世界とは異なる原理を多く保存する社会の上につくられていた。その時代の労働者の抱えていた困窮の問題は、すべてのものを商品化していく近代の交換原理そのものから発生していたが、農村の抱えていた困窮の問題は、おもに近代の原理との違いから発生していた。

農村の社会関係や世界観は、近代の交換原理とは異なる贈与的原理を中心として、つくられていた。自然を相手にする農業者の生産は、貨幣経済に組み込まれない多くの部分を含み、そのために、貨幣的世界のなかでは、貧しくなっていかにざるを得なかった。協同購入、協同販売をおこなう農業者の組合は、こういう農業と資本とを媒介する積極的な役目を果たしていたのである。

組合をめぐる大きな変化は、資本主義の内部から起こった。競争的資本主義は、資本と労働の対立を続けているあいだに、根本的な危機に陥ったのである。生産過剰に陥ったからである。資本は商品をたくさん生産して供給するのだが、それを需要するはずの労働の側が困窮している限り、物は売れず、需給バランスはとれなくなってしまう。そのために二十世紀の前半頃から、慢性的な供給過剰に陥り、恐慌が周期的に発生するようになった。この危機を乗り越えるために、大恐慌と第二次世界大戦を挟んでアメリカは、資本と労働の妥協を生み出す新しい政策を採用した。フォード主義（フォードイズム）である。

フォード自動車会社が生み出した新しい資本主義のモデルでは、労働者の生活を向上させて生活福祉を整え、賃金を上昇させることによって、彼らを積極的な消費者にしていくことをめざした。労働者を豊かな消費者にすれば、需要が増大する。労働者がみな、自分の自動車を持ちたいと思うようになる。賃金の一部を自動車の消費に向けていけば、巨大な需要が発生し、慢性的な生産過剰の問題が解消されていく。これがアメリカで発達したフォード主義というもので、高賃金・高所得・豊かな消費生活という、アメリカン・ライフスタイルの確立である。

こうして、資本と労働の大きな妥協がおこった。資本は分配の不平等を改め、労働者の賃金が向上した。するとそれまで資本と対立的であった労働も妥協して、労働組合は、ある意味で資本に組

み込まれていく状況が生まれた。こうしてかつてのような労働と資本の対立は、しだいに意味を失っていった。

しかしそのおかげで、資本主義は消費資本主義の段階に突入していった。高賃金を得た労働者が豊かな消費者として需要をおこなうのである。それと軌を一にして、さまざまな領域で技術革新が飛躍的に進み、生活水準も上がっていった。「黄金の三十年」と呼ばれる資本主義の繁栄期が、こうして訪れた。そうしたなかで、労働者の権利の延長上に、福祉の向上が求められるようになった。資本と労働の妥協のなから福祉社会が出現してきた。日本も含めて世界中で福祉社会の形成が計られ、北欧でそれは完成に近づいていった。戦後のこの「黄金の三十年」をへて、資本主義は労使妥協の上に繁栄を築くことができた。その繁栄は冷戦と一体となって、先進諸国では安定した豊かな社会がつけられた。

ところが一九七〇年代の中頃から、再び資本主義は危機に陥る。社会福祉のための支出が増大しすぎて、どの先進諸国でも国家会計を脅かし始めたのである。資本主義は資本と労働の妥協の上に成長を続けたが、その成長が福祉社会の成長とともに、ふたたび停滞に陥ったのだ。こうして長いデフレの時代が始まるのである。デフレは構造的な現象である。国家財政の大きな危機に陥ったイギリスでは、サッチャー元首相たちによってこのとき以来「新自由主義」の政策が採用されるようになる。この政策の主眼は、福祉を縮小させ、古いかたちの競争的市場主義を復活させることによる。構造的デフレからの脱却を計るところにあった。このために規制緩和と金融のグローバル化が進められるようになった。競争原理を復活させるために規制緩和し、金融をグローバル化することによって、新自由主義は資本主義の危機を乗り越えようとした。

ではこの大きな流れのなかで、組合はどうなっていたのだろうか。まず、組合は資本と労働の妥協の上に自分を位置づけるようになっていたために、新自由主義にたいする有効な抵抗原理となることはできなくなっていた。いったん資本システムの歯車に組み込まれたものは、ふたたび古い資本主義の競争原理が台頭してきたとき、有効な対抗となりにくいのである。

その動きのなかで、農業者の組合はどういう影響を受けることになったか。規制緩和はTPPに象徴されるような農産品の国際的な輸入自由化というかたちをとって、農業者の前に大きな問題をつきつけてきた。また金融のグローバル化は、農業者の協同組合そのものの金融化となってあらわれ、金融グローバルイズムの運動に直接つながられていくようになった。このようにして、労働者と農業者の「組合」は、資本の大きな運動のなかで、違ったあらわれをとりながらも本質を一つとする、大きな、危機的な曲がり角にさしかかっているのである。

今回のセミナーは、そのような現代において、農業者の組合が、どのような方向につくりかえられていかなければならないかを模索する、第一歩を踏み出そうとするものとして、大きな意義をもっている。産業労働者の「組合」は、新自由主義を前にしてデッドロックに乗り上げてしまっている。それがもたらす極端な経済格差の異様な進行に、対処することができずにいる。新自由主義政策をとると、経営者は自分の所得を自己裁量で決めることのできるシステムを発達させることができる。そうすると、人口のパーセントがその国の富の数パーセントを独占することも可能になり、現にいま、それは現実のものとなっている。この格差は、労働者といわず農業者といわず、すべての働く者たちを苦しめている。

こういう時代に、農業者の組合はどのような方向に向かって自己再生を図っていったらよいか。これが今回のセミナーの隠れた主題である。農業者の組合を再生させるための第一歩として踏み出していかなければならない。その第一歩は、もうじっさいにいくつかの地方組織において歩みだされているのではないか。そのことは愛知県のJA組織で、意識的に自覚的に踏み出そうという動きとなりはじめている。そのことを表に引き出してみようとするのが、今回のセミナーであった。

現代の世界が直面している大きな問題のひとつは、極端な格差の拡大による資本と労働の対立をどのように乗り越えていくかということにある。経済格差の解決は今日の世界の抱える最大の

テーマである。新しい形態での、資本と労働の妥協が探られなければならない。人間が直面しているもう一つの大きな問題は、自然と人間がどのようにしたら新しい妥協の形態をつくっていくかということにある。それゆえ現代において、資本と労働と自然は、三位一体のかたちをしており、相互のあいだに新しい妥協の形態を図っていくことが、いま切実に求められているのである。

農業における「組合」がもつ現代的な重要性は、まさにそこにある。農業者の組合は、資本と労働と自然の三者に深く関わっている。とりわけ人間と自然の妥協を模索しようとするとき、他の産業にくらべても、農業の果たすべき意味は重大である。農業の組合は、都市の労働者の運動からは一歩進んだところで、この課題に具体的に取り組むことができる位置にある。その動きはじっさいに地方の組合組織から起こるだろう。

愛知県の農業者の組合の取り組みにおいて興味深いのは、農村部に蓄積されてきた潜在的な知的体系を新しいかたちに再生させることによって、この危機を乗り越えていくための新しい方向を開いていくことができると、農業者自身が自覚しているという点にある。いま人間が直面している大きな危機に対して、伝統的な知の形態を再活用することによって有効な道具がつけられるのではないか、自覚しはじめている。この地域の農業者は、比較的小さな社会単位のなかでなら、資本・労働・自然という人類的な問題を解決するために必要な、新しい妥協的な組織形態をつくりだす「実

験」をおこなうことも可能ではないかとすら、考えは始めている。これはなかなか見ものではないか。

今回のセミナーでは、河合勝正組合長がひとつの精神的な運動の中心となっているJA愛知東での取り組みを事例として、高齢者医療の問題に取り組んでいる早川富博先生、農村部に蓄積されている伝統的な知の掘り起こしをおこない、それを積極的に新しい農村の創造に役立てようと模索している澁澤寿一さんをお招きし、JA共済総合研究所の川井真さんをコーディネーターとして、研究発表とシンポジウムをおこなった。それぞれの人たちがそれぞれの領域での活動報告をおこなったが、そこには共通の意識というものが見られた。それは、農業者の組合の再生は可能であり、それを再生させることは農業のみならず、人間がいま直面している大きな問題に解決のヒントを与えるはずであるという、ポジティブな思想である。このシンポジウムはまだ第一回目であるが、このような大きな問題意識を持ちながら、さらに多くの人々を巻き込みつつ、JAの一角に発生した新しい生産と文化の運動として、大きく成長させていきたいと考えている。